

憂

田中康夫

今月の憂いコト

稲田防衛相の辞任から、
安倍内閣改造、
A-1小池ファースト都政、
緊迫する北朝鮮情勢まで。

仕事について語り合う「しごとバー」を開催するなど、
いろいろな生き方や働き方に出合える場所、
東京・江東区にある『リトルトーキョー』を訪れた田中・浅田両氏。
8月の暑い昼下がり、自家製の酵素シロップのソーダ割りで喉を潤しながら、
日本の政治・経済の行方について論じ合った。

photographs by Hiroshi Takaoka text by Kentaro Matsui

浅田彰

談呆国憂

season 2 VOLUME 87

稲田防衛相の辞任と、安倍内閣改造の命運。

浅田 支持率急落に焦った安倍晋三首相が8月3日に内閣を改造した。野田聖子総務相や河野太郎外務相ら、自分に批判的な勢力も取り込んだものの、世論の反応はいまひとつ。

田中 派手さを演出しない低姿勢で「サブライズなきサブライズ人事」を狙ったと評する記事を見かけたけど、それはさすがに牽強付会(けんきょうつきかい)でしょ(苦笑)。

「安倍晋三首相は内閣を改造しました。あなたも、この安倍内閣を支持しますか」とイレギュラーな問いかけをした共同通信だけは支持44パーセント、不支持43パーセントと1パーセントの僅差で逆転したけど、これまでどおりに「安倍晋三内閣を支持しますか」とシンプルに尋ねたその他の媒体は支持よりも不支持が上回ったまま。読売新聞でも6パーセント差。毎日新聞は12パーセント差。支持42パーセントと不支持49パーセントで7パーセント差だった日本経済新聞では「経済最優先に取り組んでない」が51パーセントに達し、「人柄が信用できない」も48パーセントで、改造前よりさらに4パーセントアップしている。

巷間(こうかん)伝えられるように日経でも20〜30代は支持56パーセント不支持33パーセントで、不支持が上回る40代以上とは対照的なだけけど、7月に17パーセントまで落ち込んでいた無党派層の支持は22パーセントと依然として危険水域。「一強体制」と言われる中で気炎を吐き続ける元・行革担当大臣の村上誠一郎が、安倍体制下では「お友達か、同じ思想の持ち主か、イエスマンの3パターンしかない」と看破した、その懸念は

払拭(はらいつ)できていない。
浅田 お友達内閣の弱いところを菅義偉官房長官が豪腕(ごうわん)で締めつけてもたせてきた、それももう限界だね。

田中 「総理のご意向」と記された加計学園に関する文部科学省の内部文書が報じられた5月17日の会見で、「まったく怪文書みたいな文書」と一刀両断して、燃料投下を自ら引き起こした。ネット族が「ガースー無双」と呼んでいた「その指摘はまったく当たらない」。



首相と異なり、常に東京で待機せねばならない官房長官の激務とストレスに疲れ果ててしまっているのかも。

とまれ、その彼が目をかけている梶山弘志地方創生担当相、斎藤健農水相に加えて、地元・神奈川県から小此木八郎防衛担当相、河野太郎外相も入閣した。その一方で、東大法学部の学生時代に当時小学生だった首相の家庭教師を務めた平沢勝栄は、当選7回ながら今回も入閣しなかった。

浅田 その内閣改造の1週間ほど前に、稲田朋美防衛相が辞任した。それまで何度も辞任すべき

機会があったのに、最後の最後に追い込まれちゃった形。

田中 経済や外交、福祉といった個別の政策への是非でなく、国民はこの間「信なくば立たず」ではないかと倫理的な観点で不信を募らせているのだから、首相を筆頭に虚心想懐(こころなま)に言行一致で説明責任を果たさないと。なのに、「辞任という一番重い責任の取り方をした。辞任した大臣を国会に呼び出すことはやってはいけない」と、わざわざ支持率を下げるような発言を党幹部がするとは、理解に苦しむよ。

浅田 辞任して責任をとったっていうけど、それと真相解明とは別問題。南スーダンPKO(国連平和維持活動)に派遣されてた自衛隊の日報隠蔽問題を説明するのに当時の責任者を呼ぶのは当然でしょう。防衛相には再び小野寺五典(いのうら)が就いたけど、稲田問題まで背負わされて気の毒だね。

ともあれ、こうした問題による支持率急落で、安倍の狙う改憲は難しくなった。ところが稲田は「党に戻ったら改憲に取り組みたい」と(苦笑)。

田中 離任(りにん)式を辞退(じたい)するかと思いきや、髪形も変えて登場し、「風通しの良い組織文化を醸成(じょうせい)してもらいたい」と挨拶。自分の至らなさを反省する気配すらなく、花束を受け取り、笑顔で手を振って黒塗(くろま)り公用車に乗り込んだのはさすがに絶句(ぜつご)した。女性首相候補(こうほ)などと持ち上げられて、「促成栽培(じゆくさいばい)案件(けいあん)」だった彼女の正体見たりという感じだね。「地位は人を駄目にする」という新しい格言(ごうげん)が思い浮かんだよ。

日報隠蔽(にっぴやくぺい)疑惑(うたがひ)でも、「戦闘」という言葉が日報では頻繁(ひんぱん)に使われているのに、「憲法9条上の問題になる言葉は使うべきでない」とから、武力衝突(ぶりくしゅう)という言葉を使っている」と言い訳した。

浅田 戦闘(せんとう)の事実(じじつ)があったのに憲法上問題になるから言い換えたことを馬鹿正直(ばかまこと)に認めちゃったわけだ。

田中 彼女はゴリゴリの改憲論者。そこそそ正々堂々(せいせいどうどう)と戦闘(せんとう)の現実(げんじつ)を示して、野党側(やとうがわ)に論戦(ろんせん)を吹っかけるべきでしょ。

父親(ちち)も日本会議(にっぽんかいぎ)の熱心な活動家(かどうか)だった彼女は、「国民の生活が第一なんて政治(せいざ)は間違(まちが)っている」と支持者を集めた政治資金パーティで「伝統(でんとう)と創造(そうぞう)の道義(みちぎ)大国(だいくわ)を唱(な)える一方(いつぱ)『女性セブン』のインタヴューでは

「私にも大学生の息子がいますが、赤紙で徴兵されるのは絶対に嫌です」と読者にすり寄り寄る二枚舌だから。

「日本に平和のための徴兵制を」と3年前に『文藝春秋SPECIAL』に寄稿して登場した三浦瑠麗が、8月12日付『東京新聞』のインタヴューで「大日本帝国が本当の意味で変調を来し、人権を極端に抑圧した総動員体制だったのは、1943年から45年のせいぜい2年間ほど」と述べて、治安維持法の成立は1925年、『蟹工船』の小林多喜二が特高警察の拷問で死亡したのは1933年、国家総動員法の成立が1938年なのも知らずに国際政治学者を名乗るのかと批判されると、「(インタヴュー)記事は私が書いてはない」とツイートしてさらに失笑を買ったのに似ているね。

話を戻すと我々は南スーダン派遣に反対だったけど、唾棄していた9条の存在を稲田が隠れ蓑にするとは、ここでも責任者としての覚悟のなさがバレちゃった。

浅田 しかも、それゆえに破棄されたはずの日報が陸上自衛隊にもあった、と。シヴィリアン・コントロール(文民統制)がまったく利いてない。

田中 文民統制というのは実は、防衛省の背広組が自衛隊の制服組を制御するという意味ではないんだ。僕の友人で防衛問題に詳しいジャーナリストの坂本衛も述べているけど、シヴィリアン・コントロールの本当の意味は、軍隊(自衛隊)が国民の下にあり、その国民の代表が集う議会に統制されること。それを実現する上で、「軍人(自衛官)は政治に左右されない立場から専門的なアドヴァイスをし、その作戦を採用するかしないかを時の政治家が責任を持って決定し、軍隊(自衛隊)は政治の決定どお

りに動くことが必要で、これがまさしくシヴィリアン・コントロール」だと。だからこそ、防衛組織は政治的に中立でなくてはいけない訳で、「防衛省、自衛隊、防衛大臣、自民党としてもお願いしたい」と東京都議会議員選挙の応援演説で述べた彼女は素人以下だったと。

混迷を深める民進党、 評価が定まらぬ小池都政。

田中 にも拘らず参院予算委員会の閉会中審査では、民進党代表だった村田蓮舫の質問に、「文民統制は利いている」と胸を張っていたけど……。

浅田 その蓮舫も、都議選の惨敗後すぐに民進党代表を辞任すべきところ、ずるずる居座ったあげく稲田と同じ日に辞任した。自民党の失点を隠してやっつてるようなもの



田中康夫

たなか・やすお ●1956年東京都生まれ。一橋大学法学部卒業。大学在学中に『なんとなく、クリスタル』で文藝賞受賞。長野県知事、参議院議員、衆議院議員を歴任。最新刊は『33年後のなんとなく、クリスタル』。http://tanakayasuo.me

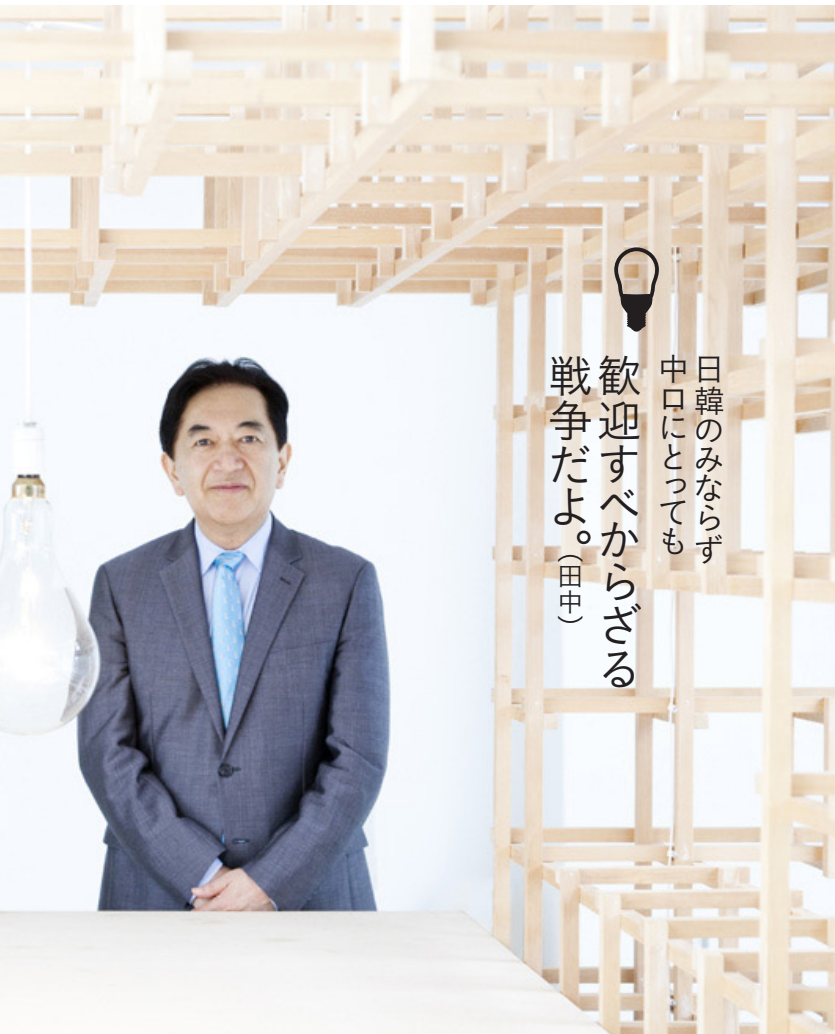
(苦笑)。後任を決める代表選挙も前原誠司と枝野幸男の一騎打ちではまったく新味がない。

田中 民進党から脱出していく連中もどうかと思うけど、ここは一気に解党を決断したほうが得策かもしれないよ。

浅田 他方、小池百合子の「都民ファーストの会」は都議選後も一定の人気を維持し、国政進出を睨んで「日本ファーストの会」も設立された。トランプの「アメリカ・ファースト」の日本版でしかないことを告白しているような名前だね。国内で見ても「日本維新の会」の二番煎じ。第三勢力と見えて、実は自民党政憲派の補完勢力でしかない。むしろ、与野党を全部シャッフルして、まともな改革の議論ができるようにしたほうがいいんだけどねえ。

田中 「二強体制」vs「野党共闘」という

日韓のみならず
中口にとっても
歓迎すべからざる
戦争だよ。(田中)



手垢の付いた言葉を超越した展開を期待したいけど、それにしても小池百合子の「AI人工知能」発言には驚いた。前号でも紹介したように、約束していた豊洲「無害化」を撤回して一旦は豊洲に移転するが築地も「食のテーマパーク」として再開発し、豊洲と築地の双方に市場機能を残す新方針を打ち出した。情報公開請求したら、財源や運営費等を検討した書類が都には何も残っていないと回答されたが、都幹部を排除して顧問団との密室協議で方針が下されたのは知事が掲げる「情報公開」に反するのは、と8月11日の知事会見で記者が質問すると、こう答えた。

「情報というか、文書が存在でないと。それはAIだからです。人工知能です。人工知能というのはつまり、政策決定者である私が決めたということです。回想録に残すことはできると思いますが、最後の決定は文書として残しておりません。『政策判断』ということですよ」

カイロ大学で学んだお前はクレオパトラを演ずる初音ミクかよ。法治主義とは真逆の人治主義ならぬ「塵痴主義」の暴走・迷走(苦笑)。何も決めず、何も行わずに2年目を迎えた小池都政も、だんだん化けの皮が剥がれてくるね。

北朝鮮のミサイル実験とトランプの「口撃」。

浅田 北朝鮮は核実験とミサイル実験を繰り返してきたけれど、どうも過大評価される気がする。

アメリカ本土に届く大陸間弾道弾(ICBM)を持つたて言うけど、7月28日の発射もロフテッド軌道で空高く打ち上げただけ。しかも、大気圏再突入に失敗して燃

えちゃったらしい。むろん弾頭は積んでないし、弾頭をしかるべきタイミングで起爆できるかはわからない。核ミサイルの完成はまだ先のことでしょ。

ところがトランプは、8月8日、北朝鮮が核ミサイルによる威嚇をやめないと「炎と怒り」に直面するだろうと、広島原爆投下後のハリ・トルーマン大統領の演説を引用して警告。対して、北朝鮮でミサイル運用を担当する戦略軍司令官は8月10日、中距離弾道ミサイル(IRBM)「火星12」を4発同時発射して Guam を包囲射撃する計画を練り金正恩に提出する予定だと発表。「日本の島根県、広島県、高知県の上空を通過し、射程3356・7キロを1065秒間飛行した後、Guam 周辺30〜40キロ海上の水域に落ちるようになるだろう」と予告した(なぜ愛媛県を飛ばしたのかは謎)。

Guam の基地からB-1Bステルス爆撃機が朝鮮半島への飛行を繰り返しているのを嫌ったんだろうね。ただ、よく読めばわかるとおり、弾頭を積んだミサイルでGuam の米軍基地を攻撃するとはもちろん言っていないし、金正恩が認めたとも言っていない(現に報告を受けた金正恩は発射の見送りを決めた)。それにもかかわらず、米朝の口撃合戦はエスカレートする一方。そもそもトランプ発言は政権内の議論なしに即興的に飛び出したものらしく、非常に危ないと思っ

うね。
田中 今こそ日本は危機回避に向けて、米朝両国の瞬間湯沸かし器リーダーをクールダウンさせる同時通訳としての外交交渉に乗り出すべき。東アジア地域で最も米国と「堅固な同盟関係」を自負し、他方で理不尽にも横田めぐみさんらが拉致されて今年で40年を迎える日本だからこそ行うべき権



金正恩は、自殺攻撃も辞さない狂信者じゃなく、ひたすら体制維持を望むエゴイスト。(浅田)

利と義務を有するのだから。

なのに、「北朝鮮問題に関して日本の首相はいつでもトランプ大統領に賛同してくれる忠実な相棒」と8月17日付の『ザ・ウォールストリート・ジャーナル』に書かれてしまった。その数日前の同紙にジェームズ・マティス国防長官とレックス・テイラーソン国防長官が連名で「核実験やミサイル発射の挑発行為を停止すれば、朝鮮半島の非核化のために北朝鮮と交渉するのをアメリカは厭わない」と寄稿したのに、日本の官房長官は終戦記念日の閣議後の会見で「対話のための対話では意味がない」と2人の提案を袖にした上で「炎と怒りを含めた」すべての選択肢がテーブルの上にあると言葉と行動で示すトランプ政権の姿勢を高く評価している」と駄目押ししたのを受けての東京特派員の記事。

浅田 彰

あさだ・あきら ●1957年兵庫県生まれ。
京都大学大学院経済学研究科博士課程中退。京都造形芸術大学教授。
83年に出版されたデビュー作『構造と力—記号論を超えて』はベストセラー。



浅田 テイラーソンはすでに8月1日の段階で、中国にも配慮しつつ「我々は(北朝鮮の)体制の崩壊を求めておらず、半島の再統一の加速や、38度線の北側に米軍を送る口実も求めていない。……我々はあなた方の敵でなく、あなた方の脅威でもないが、あなた方は我々を受け入れたい脅威にさらしており、我々是对応しなくてはならない」と表明していた。実際、アメリカはロシアや中国の核を容認してきたんだから、北朝鮮の核も容認するほかない。金正恩は、自殺攻撃も辞さない狂信者じゃなく、ひたすら体制維持を望むエゴイスト、その点ではトランプより理性的とさえ言えるんで、抑止戦略が利くわけよ。むろん、理想は朝鮮半島(ひいては東アジア)の非核化だけ、それにはアメリカも核戦力をちらつかせるのをやめないとね。

しかし、トランプは正反対の道を示唆している。トランプと話したリンジー・グラム上院議員によれば、北朝鮮が核ミサイルを放棄しなければ戦争になる、それはアメリカじゃなく「向こう(朝鮮)での戦争だ、韓国や日本も巻き込まれる可能性があるが仕方がない、と。こんな発想で核使用までちらつかせる大統領ってのは危険きわまりないよ。

田中 まったくね。日韓のみならず中ロにとっても歓迎すべからざる戦争だよ。比較的冷静な国務・国防両長官だけでなく、国家安全保障問題担当の大統領補佐官を務めるハーバート・マクマスター陸軍中将、国土安全保障長官から大統領首席補佐官に転じたジョン・F・ケリー元・海兵隊大将も、同様の認識を共有しているみたいだし、トランプの懐刀だったステイヴン・バノン大統領首席戦略官が解任されて極右ネットメディア「ブライトバート」に戻ったから楽観視する向きもいるけど、引き続き大統領はトランプだからね。

浅田 1994年の危機のときは、ジミー・カーター元・大統領が訪朝して金日成主席と会談、核開発の凍結の約束を得て事なきを得たわけだけど、当時のウイリアム・ペリー国防長官によれば、戦争になれば10万人単位の犠牲者が出ただろう、と。その条件はいまもまったく変わっていない。双方が正気に戻るよう祈るばかり。

田中 北朝鮮問題は流動的だから次号でも話すとして。視聴率や部数稼ぎなのか、明日にも戦争だと煽る日本のメディアや、国民の生命と財産を護ると胸を張ってPAC3を4基配備したものの、射程20キロなので中国・四国地域の96パーセントが迎撃圏外という「笑撃」の事実も含めてね。